〈発表要旨１〉

15 世紀、成宗朝における朝鮮王室の仏事と絵画

李 智英（九州大学大学院博士後期課程）

韓国の仏画は、13・14 世紀の高麗仏画はもちろん、朝鮮前期の仏画、つまり 15 世紀から 16 世紀後半までの現存作例のうち、ほとんどが日本に伝来している。このような中で、近年出版された朴銀卿氏（韓国・東亜大学）による『朝鮮前期仏画の研究』（2008 年・時空社）は、朝鮮前期仏画を網羅する情報を載せた研究書であり、これまで韓国の仏画研究において空白期となってきた朝鮮前期仏画の考察を深める大きな契機として高く評価される。ただし、これ以降、朝鮮前期の仏画の研究は、盛んに進められているものの、考察の中心は、現存作例の多い 16 世紀に置かれてきており、15 世紀の仏画については、研究方法において作例解説や形式の説明に留まり、まだ十分な検討は進んでいない。本発表では、15 世紀後半の成宗朝を代表する作例と考えられる「三帝釈像」（成宗 14 銘・福井永平寺蔵）を中心に考察を行い、当時の王室をとりまく文化的・宗教的・政治的環境に留意しつつ、発願の目的、及び成立の事情について解明していく。

「三帝釈像」は、図像においては高麗仏画を規範にしながらも、その彩色は、一般的に金泥を多用した従来の高麗仏画とは別趣の、明るくて柔らかい色調による 15 世紀後半の朝鮮王朝仏画の典型とみなしうる。本図の初論として井手誠之輔氏は『國華』1313 号（2005 年・特集高麗仏画）で、聖沢院蔵「帝釈天像」の尊格を究明するにあたり、本図を取り上げて帝釈天であると比定している。一幅に三体の帝釈天をあらわした経緯として、当時成宗の周辺にあった先王妃（貞熹王后・昭恵王后・安順王后）を尊格に投影した可能性を述べ、さらに、銘文の内容から発願の目的を貞熹王后の病気と関連づけ考察したことで多くの示唆に富んでいる。本発表では、先行の考察を参照したうえ、本図に関わる時代相をより具体的に考察するため、朝鮮前期仏教の造像にあらわれる一般的な跋文の形式と照らし合わせながら、欠落によって判然としない箇所が存在している銘文の解読を試みる。これによって、当時王室周辺で発願された版本の跋文や『朝鮮王朝実録』の記録などを参考にしつつ、本図の発願者が貞熹王后（1418～1483、当時大王大妃）であることを明らかにする。貞熹王后は、朝鮮王朝第 7 代王である世祖（1417～1468）の妃であったころから崇仏造仏の中心人物であり、1469 年から 7 年間は、即位当時幼かった成宗の代わりに垂簾聴政を行った最高の実権者であった。「三帝釈像」は、貞熹王后が行った仏事のひとつとして、14 世紀後半から朝鮮王朝の建国理念であった性理学的な思想の下、排仏政策によって、政治的な影響力を喪失した仏教の動向、つまり、王室の女性と宗親の後援をもとにし、その命脈を保っていた特殊な仏事の状況をあらわす作例であることを提示する。

〈発表要旨 2〉

J.M.W.Turner の洪水連作—《洪水の夕べ》の位置づけから

岩永 亜季（九州大学大学院博士課程）

J.M.W.ターナーは 19 世紀英国を代表する画家である。彼は 1843 年に 2 点の洪水主題の作品をロイヤル・アカデミーに出品した。それぞれ《光と色彩》《影と闇》と題されたこの連作は、ターナーの代表作と目されるにも関わらずいまだ解釈の余地が残る作品である。

洪水連作の内、《影と闇》には、類似の構図を取る《洪水の夕べ》という作品が存在する。　この作品は恐らく 1843 年の洪水連作と同時期に描かれたと推測されている。しかし、研究者によって洪水連作に先行するか否か、作品の位置づけに関する見解が異なっており、その構図上の類似にも関わらず洪水連作解釈において重視されているとは言えない。

本発表では、この《洪水の夕べ》の図像表現や主題について検討し、本作と洪水連作の関係を明らかにすることで、洪水連作解釈の新たな一側面を明らかにしようとする。

洪水連作が、ゲーテの『色彩論』の影響を受けて描かれた作品であることは、《光と色彩》のタイトルに示されている通りである。しかし、《洪水の夕べ》には洪水連作ほど『色彩論』との共通点は認められない。《洪水の夕べ》は構図上《影と闇》と類似しているが、色彩において異なっており、『色彩論』を意識せずに描かれたと推測される。

また、《洪水の夕べ》には古生物と思われるワニのようなものが描かれているが、洪水連作と地質学論争の関係は既に先行するターナー研究で指摘されている通りである。当時、地質学の分野では激変説や洪水説と斉一説との間に論争が生じ、化石をノアの洪水の遺物とするかといった、地質学上の研究成果と聖書の記述との掏り合わせ、あるいは齟齬の指摘が行われていた。《洪水の夕べ》に見られる洪水と古生物描写という組み合わせは、この洪水論争を受けてのものであろう。加えて本発表では、この古生物の図像源泉として、これまで触れられてこなかった化石の復元図という可能性を指摘する。ターナーは版画素描を提供する過程で各地を旅しており、化石発掘場として高名であったドーセット州も 1810 年頃に訪れている。更に、《洪水の夕べ》に見られる地質学的関心は、古生物ではなく化石と思しき描写として《光と色彩》細部の描写にも引き継がれていることを指摘する。洪水の前に古生物、洪水の後に化石という描写は、洪水説の主張と合致するものである。

更に、《洪水の夕べ》には横たわる人物群が描かれているが、ワイン壷を並べ、赤い布で腰から下を覆った彼らの描写は、ノアの酩酊やロトの物語を想起させる。いずれも洪水の後、あるいは神の手による災厄の後の人間が起こす事件である。これらを想起させるような細部を描くことで、ターナーが《洪水の夕べ》に洪水という事件の時間経過や、その後の問題をも示していたことが伺われる。

以上より、《洪水の夕べ》は、洪水連作に先行する単なる失敗作あるいは後続の売り絵ではなく、洪水連作の派生元として捉えるべきだということが分かる。更に、この仮定に基づいて洪水連作を精査することで、『色彩論』受容によって、洪水連作制作に際して生じた変化をより明らかにすることが出来るのである。